藤女子大学
藤女子短期大学

No. 21

図書館だより

'85.6

目　次

未知なるものへの憧憬
矢野雋輔…… 1
ぶらうじんぐる〜む
昨今
渋谷美香子…… 2
資料紹介…… 3
図書館をあなたのものに
指定図書
―その使い方―
山北タツエほか
……4〜9
海外記
中国の塔めぐり
中野美代子
……10〜11
NEWS…… 12

未知なるものへの憧憬

矢野　雋輔（自然科学）

産業革命、血腥いフランス革命は、その反動としてロマンチシズムの時代を迎えた。ロマンチシズムとは「未知なるものへの強烈な憧憬を意味する。その中には、強い力を秘めている。ロマンティックという言葉を、恋人と腕を組んで夜道をそぞろ歩きをしたら、星は流れ、風は甘かったなどという、リリシズム、センチメンタリズムと混同してはならない。ドイツのイエナを中心として、青年詩人ノヴァーリスの「青い花」から始まったローマン文学運動は、既存の理知を超え、微視的な分野にまで、一切の束縛から離脱して探究の歩を進め、ガルバニイは切りとったカエルの脚の屈曲から、生物電流の発見、ギリシャ時代から一歩も前進し得なかった静電流の世界を、今日の電気文明の基盤を形成する動電気学の世界におしすすめたのである。

未知なるものを、未踏の地におき変えると、南北極点に、エベレスト、K_2、ナンダ・デヴィトの地理上の一点に、生命をかけて挑んだアルピニズムとなる。「神の念じで長靴から足をひき抜いた。凍傷でくさり果てた足の指は一本もついてこなかった。もう一度足をさし入れ静かにひき抜いてみたが、やはり指はついてこなかった。」極点に散ったアルピニストの手記である。

ロマンチシズムは、文学者ゲーテ、哲学者ヘーゲル、宗教家シュライマッヒャーを生んで、「もっと光を」という言葉を残して、ゲーテがこの世を去った頃から、衰退に入り、その反動として、またリアリズムへの思想変革を迎えることとなる。

しかし、私は学生である諸君には、飽くまでこのロマンティッ

クを心のどこかに止めていることを切望している。そして「未知なるもの」とは、諸君が今後学んでいく知的な無限の広野であり、胸を張って一歩一歩、この広野に歩を進めていただきたい。知的な人間の向上は、時にはその実利実用、利潤の回収を無視する事もある。未知なるものへの憧憬、その追及に真の意義を見出した若者が、真の学徒であり、学生である。

この知的な広野への道標が、図書文献である。胸ときめかして、書物のページをくる若者であってほしいと思う。図書館の書架の前に立って、心躍る若者であってほしいと思う。そして知的に今よりももっともっと美しくなってほしいと、私は願いつづけている。

ぶらうじんぐるーむ

昨　今

渋谷美香子

（昭和59年度文学部国文学科卒業）

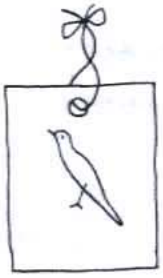
わけあって休学したため、学生時代が五年間そして卒業して一年を経、藤の図書館との関わりも六年になる。

私の入学当初は、入館のたびごとに身分証明書を提示しなければならず、また書庫も今のように出入り自由ではなく、いわゆる閉架式であって、土曜の午後などに行なわれていたガイダンスに自主的に参加した者達のみ入れる特権があり、よくカウンターに「キャレルの番号札を貸して下さい。」と断わって書庫の中を探索した。

長期の休みのたびごとに雑誌や新聞の位置が変わるとか、書棚が移動するとかいうのは、この際、変化のうちに数えぬとしても、年度が変わるたびに入館方法が変わるのには驚かされる。

そののち、身分証明書の提示もいらなくなり書庫へも自由に出入りできるようになった。また以前は、バッグは必らず図書館内のロッカーにおさめなければ入館できず、うっかり持ち込もうなら、カウンターから「もしもし」と声をかけられるのが常であった。ところが今はブックディテクション・システムの導入で、それさえ許され、あの金属製のバーを押すことさえ厭わぬなら、何を持ち込んでもよくなった。

たったここ六年を振り返ってみてさえ、確かに便利になったし、機能的にもなった。しかしいつも、便利さを求める「心」よりもそれを直接体験する「身体」の方がほんの少しだけ、適応が遅いようだ。私は懐古主義者ではないつもりだが、今でもときどき、自分のカードファイルにおさめてある、学生時代の借りた本の「書名」の書き込んである貸出カードを繰って眺めてみることがある。が、いつの頃からか貸出カードは数字と記号の羅列になり、私は収集をやめてしまった。やはり同じ頃から、カウンターで所属と氏名を告げることを免れた代わりに私は「文国○年の○番」になってしまった。煩雑であることは誰しも好まないであろう。しかし何かを切り捨てていったときの違和感に慣れてしまうには、私の場合、いつも少し時間がかかる。



資料紹介

『日本古典文学大辞典』（岩波書店）

「日本の古典は　今後　この大辞典がなければ語れない」大辞典刊行とザンゲの記

伊藤　敬（館長・国文学）

10余年の歳月をかけて、岩波書店の　**日本古典文学大辞典**　（全6巻）が、この2月に完結した。新潮社版　**日本文学大辞典**　の増補新版は昭和25～27年に出ているから、同規模のものとしては約一世代を隔てての大事業である。

収載項目1万3千、古典文学のみでなく隣接諸学も含み、戦後の学界の成果を広範囲にわたって収めていて、文字どおりの大辞典である。古典文学研究者はもちろん、古典に関心ある人への、最大の贈物であろう。心からの祝意を表したい、喜びたい。

ところで、依頼されての小文だから、型のごとく祝意を表してはみたものの、実はそうはいかない。執筆者857人の一人として莫大？な原稿料を頂戴していながら不謹慎な話なのであるが、ここでザンゲしないと後味が悪いので、この紙面を借りて白状しておきたい。

「一条兼良」の項に、応仁の兵火で「一条邸や文庫桃花坊が焼失」と記してある。実はこれうそなのである。従来の兼良伝は、私の見た数種（含人名辞典等）すべてそう書いてあり、そう書くことで当時の碩学関白兼良へ同情を引きつけるようになっていた。私も、今にして思えばきわめて安易・不用意にそうしてしまった。一昨年、兼良の伝記を書くべくその著作物を読み返していた時、『筆のすさび』（連歌論）に、文庫は瓦葺き壁作りだったから「余焔には逃れ待りしかども、その辺の白浪どもたちこぞりて銭帛を収め置きたるとや思ひけん。時のほどに打ち破りて」しまい、

数百合の紙魚（しみ）のすみかを引き散らして、十余代家に伝へし和漢の書籍ども、一巻も残らずなりにけり。

と書いてあったのである。文庫桃花坊焼失は事実でなく、まして蔵書焼失はなかったのである。

兼良の伝記として有益な書は、歴史学者永島福太郎著　**一条兼良**　（昭和34年刊）なのであるが、そこにも、邸宅・桃花坊ともに焼失とあった。ところが、同氏筆の　**国史大辞典**　第一巻（昭和54年刊）の項では、「邸は焼かれ、文庫「桃花坊」の蔵書は散乱し」となっている。実に憎いと思っても、今はどうしようもない。私は二つの罪を犯した。一つは原拠未確認の怠慢であり、一つは刊行前に（それが印刷所に廻っていたにしても）、積極的に訂正申し入れをしなかった怠慢である。水をかけられるのはいやだが、これがザンゲである。別の資料で実は蔵書も焼けたのだとなればありがたいのだが、その可能性はなさそうである。今はつらい思いでいる。

ここで、非を教戒に転ずれば、レポートはもちろん、卒論を書く人は必ず典拠を確認してほしいこと、複数の参考書・辞典等は必ず全部照合すること、自戒をこめてお願いする。

この小文の意図、資料紹介にもどると、新潮社版に比して小項目主義になっているから、近年の細分化・多岐の研究に応じられる内容であること、参考文献が有用であること、それぞれの権威（除私）の執筆で水準の高いことなどなどがあって、標題の文句（書店広告）に偽りはない。大声で言えない後めたさは許してもらい、ここから60年代以降の古典研究が始まるとして、大方の積極的な活用を期待しておきたい。

図書館をあなたのものに

指　定　図　書　ーその使い方ー

本学図書館は、利用しやすい全接架制です。求める図書を目録でたしかめて、利用者がその書架で手に取ることが出来ます。が、資料の配置は、前号で紹介した文庫本のようにコーナーを別にしている図書があります。美術全集などの大型本、辞書・事典・地図類、そして講義の必読書として教員が指定した図書です。今回は、この指定図書に焦点を当てて、効果的な利用となるよう講義についての意見も含め、専門学科の学び方などを、学生にアドバイスしていただきました。

山北タツエ（英文学）

大学教育において図書館は心臓部であって、図書館の利用なしには授業がなりたたない。これは米国留学で顕著に感じたことの一つである。教員と図書館とは頻繁緊密な連携を保ちつつ、学生の自学自習の便を計るのである。こうした点から指定図書制度が生れたのであろう。

入学するのは困難であるが卒業するのは易しい日本の大学と異って、米国では、入るのは易しいが卒業するのが難しい。卒業どころか毎日を送るのが大変である。教授の指定する読書の量はかなりなもので、学生はそれを読み、調べ、意見をもって授業に出て発表する。その発表をもとに全クラスがディスカッションを行うという教授法が殆んどで、学部では講義をきくだけというのは非常に少ない。故に、指定図書を読まずには授業についてゆけないのである。そのうえ、毎学期 research paper の提出もある。図書館利用なしの大学生活は考えられないのである。

この紙面を借りて、今年度の特殊研究（英米児童文学）の中で私の受持つ英国児童文学の指定図書を紹介します。私の場合、学期始めに全期に渡るプランを発表するので、学生はそれらの中から作品を選んで調べ、発表し、期末には research paper を提出することを要求されるので、どうしても図書館を頻繁に利用しなくてはならない。発表の如何に関係なくどうしても読んでおくべき図書、発表に必要な図書、出来れば読んだほうがよい図書など、指定の意図は種々であるが、一応その中から主なものだけ、次にあげる。

英米児童文学史　瀬田貞二・猪熊葉子・神宮輝夫著　研究社

児童文学論　リリアン・H・スミス著　石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男訳　岩波書店
＜The Unreluctant Years
（American Library Assn）＞

本・子ども・大人　ポール・アザール著　矢崎源九郎・横山正夫訳　紀伊国屋書店

英米児童文学　高杉一郎編著　中教出版

イギリス児童文学論ーその伝統と特質を探る　吉田新一著　中教出版

イギリス児童文学の作家たちーファンタジーとリアリズム　猪熊葉子・神宮輝夫著　研究社

The Oxford Companion to Children's Literature
H. Carpenter and M. Richard
（Oxford Univ. Press）

Children's Books in England
F. J. Darton（Cambridge Univ. Press）

子どもの本の歴史　上・下 J.R. タウンゼンド著

高杉一郎訳　岩波書店
＜Written for Children
（Lothrop）＞

オンリー・コネクト－児童文学評論選　1－3
S．イゴッフ他編　猪熊葉子・清水真砂子・渡辺茂男訳　岩波書店
＜Only Connect
（Oxford Univ. Press）＞

子どもの本の世界－300年の歩み　ベッティーナ・ヒューリマン著　野村泫訳　福音館書店

児童文学の研究の歴史は英国においても日本においても浅いので、個々の作品についてまとまった研究書があまりない。そのため学生は、児童文学関係の雑誌その他に、バラバラに掲載されているものを探し集めなくてはならないであろうが、お膳だてができた分野より、開拓のよろこびを味わえるかもしれない。

児童文化学科という学科が関東の某女子大学に新設され、今後の研究の動向が興味をひく。大人の無知、無関心、放任主義のためか、弱年者の犯罪が社会問題となっている今日、児童文学の研究が、母となる女性にとって、子どもを本当に知り、理解する一助ともなればと思う。

小笠原　克（国文学）

与えられたのは〝講義をより深く理解するために、指定図書の効果的な使い方をご紹介ください〟という課題である。

図書館に入ってすぐ左手、別置されている幾列かの書架。そこに佇み、取り出した本をめくり読みする学生の姿は、何となくキマッテイルかに見える。

ここで、〝本の読み方〟を講釈するつもりはない。だいたいが、本の読み方なんてものがあるものか。みんな、自己流儀で本の世界に入ってゆくだけだ。

しかし〝指定図書〟となると、これは義務づけられ、ないしは強制され、というイヤなイメージがつきまとう。指定スルトハ何ダ、オラオラデヒドリエグモ、という一人狼の学生が居たところで不思議はない。

とはいえ、講義のテーマ、内容が限定されている場合、とりあえずその範囲と周圍を具体的に示す実際の書物を、ともかく手に取り、めくり、眺め入ることは、十分とはもちろん言えないが必要な仕事であるだろう。私は、指定図書を全く顧みない学生も、指定図書だけに取りつく学生も、ともども信用しない。

さて、例を昨年度の私の場合の一件に限って紹介しよう。

短大、文学部双方に、同じ講義（講読）題目を掲げた。

「文学における〝風土と人間〟」

である。

〝講義内容〟のコメントは、

自然と歴史が生成する〝風土〟、そこに生き、感じ、考える人間、その表現としての文学。これらの問題を、〝北海道〟を宗基として追求する。

テキストは、

小笠原克編　**日本文学のなかの＜北海道＞**

であった。

このテキストは、既刊の立風書房版　**北海道文学全集**　全24巻、別巻1巻から、主として短篇小説をセレクトして編んだものである。

そこでまず、当然ながら〝親版〟である　**北海道文学全集**　全巻をリザーブする。各巻それぞれに「新天地のロマン」「漂泊のエレジー」「ヒューマニズムの道程」などのネーミングがあって、これら全体から日本文学のなかの＜北海道＞のイメージをつかめるだろう。

そして例えばテキスト収録の長田幹彦「霧」が第2巻「漂泊のエレジー」に、石川啄木、岩野泡鳴、葛西善蔵の、おそらく読んだことのない作品群と同居していることを知り、幹彦作品

に興味を惹かれたなら、それらの作家作品に立ち向かえばよいのである。さらにそこから、例えば　**葛西善蔵全集**　へと読み進む道が開けてもいるわけだ。つまり指定図書は、テキストの世界から文学一般の世界への〝招き猫〟だと思えばよい。

つぎに（面映ゆいけれども）私の著書　**近代北海道の文学**　ほか数点をリザーブする。たまたまテキスト編者と講義担当者が同一であれば、これはやはりその人物の関連著作や論文類が受講するうえで無益ではないのだから、なにもセンセイのゴホンだなぞとは思わずにずけずけと踏みこむべきである。事実や認識や評価の食い違い・誤りを見出した時の快感は、この場合特に大きいはずである。そしてまた、良かれ悪しかれ著者のトータルな≪北海道≫の文学像に触れることを通じて、テキストの個別な作品読みを幾まわりか越え出たところに、かなりに刺戟的な問題が横たわっていることを知り得るだろう。地域性と全土性、という問題性も含め、風土なるものが文芸の契機たり得るさまざまなケースを、自分の研究テーマにすることも可能である。

ほかに木原直彦氏の　**北海道文学史**　全3巻と　**北海道文学散歩**　全4巻をリザーブする。木原氏は文字通りに北海道の文学の、ことこまかな点に至るまでの〝生き字引き〟であって、つまりこれらの本が出版された時点で、確かめ得ることのほとんどすべてが網羅されている。各巻末の索引をこまめに利用すれば、これが実質的な〝北海道文学辞典〟であることを知る。

そこで例えば、あなたの生地とゆかりのある文学者は？　というサイドワークの楽しみも享受できるのである。

そのほか各ジャンル別の文学史的著述や、大作のため　**北海道文学全集**　収得を見合わせた作品や、この全集以後の新しい作家のアンソロジー的なシリーズや、アイヌ問題関係の資料集や、息抜きのできるカラー版〝文学の旅〟的な本や――何やかやを、それぞれの〝氷山の一角〟にすぎぬが、リザーブする。

要は、講義担当者の、問題に対するビジョンとイメージが、受講者とどう響き合うか――　指定図書コーナーは、その親和、交錯、対立などのドラマを潜めて静まりかえっているのである。

藪　禎子（国文学）

指定図書は、演習を中心にほぼ毎年出している。内容も冊数も、さして多くはない。基本的なものを、最低限に近い形で選ぶだけである。

図書館は全学生共用の施設だし、その中で特定少数の受講者の便宜のために、一般の利用を妨げる結果になってはまずいという考えもある。もうひとつ、こちらの手で変に親切に揃えてしまうと、それが逆に学生を縛り、過保護になって、自在な展開を損ねてしまうのではないかという恐れもある。

演習の形態は、もちろんさまざまである。一人の作家を系統的に追う場合、多くの作品・作家をむしろバラエティーゆたかに取り上げようとする場合、一年じっくりかけてもなお手に余る大作に取り組む場合、一つのテーマを設定してそれをジャンルにこだわらず検証してみようとする場合、なおいろいろある。しかし、どんな場合も、柱とすべきものは当然あるわけだし、これを基本的なところでガッチリ押さえ、見通しながら、その中で自分の分担を生かし、それを積み重ねることで有機的に展開させるのが、演習というものの望ましい形なのだろうと私は考えている。そのための取っ掛かりとして指定図書を置くのであって、ここは入口であり、〝ここからあなたが自分の道筋をどうたぐり出すか、期待して待っていますよ〟というのが本心である。

ところが、その狭い本棚の空間をサッと一巡

りして、ほんの一部自分の割り当てに直接関係のある部分だけ、パッとちょん切る形で済ましてきたらしい例にずいぶんぶつかる。発表はそれだけ断片的となり、当番の日をともかくも勤め上げると、もう我が事終われりといった形で、あとは出席時数確保のためにのみ顔を出しているといった感じの者も少なくない。当方の指導、力不足による所も多々あるし、忸怩（じくじ）たる思いが時にうずくが、学生の側の淡白さ、安易さが問題である場合も多いと言わねばならぬ。

これは、要するに、問題意識なり主体性なりの稀薄さによるものと思われる。読みとか理解とかを抜きさしならぬものとして自分のうちに固めるためには、然るべき心構えと時間が必要なはずである。自分の当面の範囲を手軽に仕上げ、繕（つくろ）うために、光学のお知恵寸借などというのは、実は何物でもないのだという事を肝に銘じて知っておく事が必要だろう。

改めて言うが、指定図書というのはあくまでも入口を示したものであって、それからさきの展開にこそ本当の勉強があるのだという事を認識しておいて欲しいと思う。

具体的な例で少し追ってみよう。明治期の作品は、近代と言っても、今の学生にとってはほとんど古典に等しいというのが実状であろう。樋口一葉など、注釈なしに気軽に読みこなす事などほとんど出来ないだろう。今なお読者が多いと言われる漱石にしても、基本的な単語とか語句の面で引っ掛かる作品がかなりあるはずである。注釈とか鑑賞の仕事が、近代文学の分野で近来とみに目立ってきたのは、この百年余の日本の歴史、言語表現の実質的変化の大きさに促されての事である。とすれば、一知半解のうぬぼれを捨てて、言葉の意味内容を確実に押さえる努力、姿勢をまず身につけて欲しい。何げない作品の、小さな単語一つに、近代史の大きな意味が込められていることも少なくないのである。具体的な読み込みこそ、文学研究の出発点であり、到達点である。しかし、それは、文学の狭い枠、限られたコーナーの中だけで可能となるものであるまい。

注釈書の類いには、<補注>というのがよくつけられている。これにも十分眼を通して欲しい。<補注>を必要とする部分こそ、実は最も重要であり、問題性を孕んでいるというのが多いのである。そこにこそ、注釈者なり研究者なりの面目と識見がモロに出てきているのだとも言える。当然こちらの検証も問われる事となる。ところが、学生はほとんどこれに眼を向けてくれない。その分だけ、読みは平凡、そして平面的となる。何が肝腎であるのか、何を考えねばならぬかが見えてこないわけである。<感性>ばやりの昨今だが、<感性>もまた鍛えられてこそ本物になることを忘れてはなるまい。<感性>が、つまりは独善や錯覚の言い訳でしかなかった例を、私はずいぶん見せられてきたような気がする。己れを賭けた格闘、論理化への粘り強い努力、自己の血肉とするための一途な叡知（えいち）を見せて欲しい。指定図書の狭い空間を一夜漬けの場、己れの安心と自足の場としないで欲しい。勉強というのは、もともと取り組めば取り組むほど、分からない事に多くぶつかり、調べを深める程に芋づる式にさきへさきへと広がるものではなかろうか。

指定図書コーナーなど早く潜り抜けて、広い空間に改めて眼を開き、己れの道をしっかと踏み出す、そうした時と志をこそ私は待っている。

黒川　昭和（教育学）

教育原理（講義4単位）の内容に即して、前期（夏休み）後期（冬休み）のレポート課題をそれぞれ3題づつ課している。その課題解決の手掛かりとなるであろう文献を、「指定図書」として選定しているのがその第一の理由である。

最近2～3年の課題を紹介すると、①教育原理指定図書（文献）目録の作成とその分類、②教育とは何か、人間にとって教育は何故必要なのか、③「自己指導の原理」に関する一考察、④「生徒の理解の方法」に関する一考察、⑤「教育評価」に関する一考察、などはその一例である。保育科の場合は、「幼児教育の課題と基本的文献の探索」という作業を、②の課題と併せて課している。

大学に入ってから本格的に勉強をするようになったと記している大多数の本学の学生は、これらの課題と誠実に取り組み、教師を感激させてくれる。例えば課題①に関して或る学生は、実に121枚も書いている。この学生に限らず殆んどが様々に工夫をして文献目録の作成とその分類を試みている。

目次を見ると、○分類の基準、○分類を終えての感想、1. 教育理論、2. 教育哲学、3. 教育法規、4. 教育方法、5. 教科別指導書、6. 生徒指導、7. 教育評価、8. 教師論、9. 教職実務、10. 事典・辞典、など分類方法の一例であるがこの他に、「日本十進分類法」によるもの、「教育原理テキストの各章別の参考文献」とするもの、など多様である。

文献目録作成後の感想を記して或る学生は、「分類の基準として以上のような10の分野に分けてみたが、教育と一口に言っても10の分野に入りきらないほどの、たくさんの内容を含んでいるということを感じた。それと共に、読むべき本の量に驚いている。実際に、全体を読んだ本は、まだ数冊程度である。教育実習まであと一年も無いというのに、こんな状態でいいのだろうか。自分の認識の甘さに自分であきれている。"知らないことがたくさんある"ということが厳しく認識できたことを、今回の収穫であると思って、これからは考え直そうと思う」と述べている。

課題、②に関して或る保育科の学生は、**野生児の記録 ――オオカミに育てられた子――**を読んで、私は大きな衝撃を受けずにはいられなかった。私自身その狼っ子達に興味を感じたのは事実であったが、それだからといって自主的に記録を読んでみようという気は生まれないまま現在に至っていた。でも今回、レポート課題の一環としてではあるが、この記録に接することができたことは、私にとってとても重要なことであり、また幸福なことであったと思うのである」と記して、レポート課題の作業を進める中で指定図書の数冊に出会い、過去の経験を更新するような大きな発見とその衝撃とを感銘深く述べている。

指定図書選定の第二の理由は、教育原理のテキストの内容をより広く深く理解するのに役立てようと意図してである。単行本に限らず様々の出版物も含んでいる。例えば、道立教育研究所刊行の紀要や様々の研究報告書、道教委や市教委刊行の様々な指導資料や研究報告書、日本教育学会や教師教育研究機関刊行の研究報告書などがそれである。

教育原理講義の制約の中で、教育現場の研究報告書は大へん役立つと思うし、教育実習に出掛ける前に「学校」を理解するためにも重要である。この点で、先輩の残した「教育実習日誌」は極めて貴重である。現今の重要な教育課題の一つは、「教師教育」であると思う。よい教師（Well prepared teacher）に求められる資質や能力は何か、という課題が真面目に研究されつつある。

教育原理の講義の在り方や内容についても、全国的に真剣な研究と実践が積み重ねられている。諸外国においても教育実習に関する学位論文をはじめ、教師教育プログラムの研究開発が盛んである。国内のみならず国外にも目を向ける必要があろう。幸い本学図書館には、**Education Index**をはじめ、**Encyclo-**

pedia of Educational Research などや諸外国の雑誌も入っているので大いに活用してほしい。

要は、学生自身が、初期教育や青年期教育の優秀な教師を目指して、自己を成長させることが大切である。そのためには、よい教師になるための自己課題の発見と、一般教育、専門教育、教職教育で学びつつある知見を、教育問題解決のため「統合」（ integrate ）するという課題とが、学生自身に課せられていることを知るべきである。従って、学生はたえず指定図書に気を配り、最新の情報を見逃さぬよう努めてほしいと思う。

その他の指定図書展望（５月現在）

英文学科関係

新井先生―英語学―英語発音学・発声学
板垣先生―英文学―ヘンリー・ジェイムス
江草先生―英文学―アメリカ史、アメリカ研究、演劇の歴史
高橋先生―英語学―英語史概要、音声学
永田先生―英文学―シェイクスピア（一部）

国文学科関係

青木先生―国文学（近世）―近松門左衛門、井原西鶴、松尾芭蕉、上田秋成、能・狂言の作品と研究書
漆崎先生―国語学―国語辞典（一部）、国語学講座、キリシタン資料の国語学的研究、節用集、国語史講座、節用集、日葡辞書研究
中山先生―国文学（古代・近代）―万葉集大伴家持、斉藤茂吉（一部）
藤村先生―国文学（中古）―源氏物語の辞書・事典、作品と研究書の一部
宮本先生―中国文学―列女伝

家政科関係

阿部先生―調理学―調理と理論
飯村先生―家政学―家計統計書、生活学関係書

保育科関係

小野先生―音楽―絵本ほか
中野先生―児童心理学―子供文化の原像、育ちゆく子ども、遊びの心理学、発達心理学ほか

一般教育関係

宇野先生―歴史学―アジア史、史記
落合先生―哲学―西洋哲学史、田中美知太郎著作集、バートランド・ラッセル著作集（一部）
後藤平吉先生―法学―世紀（雑誌）の一部
松本先生―書道―書道史、日本名筆全集

レポート・論文（教員及び図書館の指定）

英文科・国文科・保育科等の学生の為のレポート・論文の書き方ハウ・トカもの

目録カードをひくと、図書館にあるはずなのに一向に見つからない、貸出中でもないのにといった経験をしたことがある方、指定図書コーナーにも行って見て下さい。そこには、大切な本が置かれているのです。

なお、その指定図書によって、貸出期間と、冊数が異なりますので、不明な点は、係にご相談下さい。

海　外　記

中国の塔めぐり

中　野　美　代　子　（講師・中国文学）

こんな題をつけたが、前後三回の中国への旅、いずれも短期間であるから、あまたある仏塔のほんの少ししか見ていないし、まして自分の足で登ったのは数えるほどしかない。しかし、未見のものをも含めて、中国各地に屹立する塔には心ひかれるものが多い。それを紹介しよう。

西安――いわずと知れた古都長安であるが、このまちのシンボルは大雁塔である。市街の南のはずれにあり、四角七層で高さは64メートル。唐第三代皇帝の高宗がおこした大慈恩寺の境内にあり、西天取経の旅から帰国したばかりの三蔵法師玄奘がインドからもち帰った経典類を収めるために652年に建立した。はじめは五層であったが、修築を重ね、いまの姿になったのは五代の933年である。

福建省泉州市開元寺の西塔（筆者撮影）

磚（せん）塔であるから、日干し煉瓦を積みあげたものだが、千年の歳月を経てもビクともしない風格がすごい。小説『西遊記』を専門とする私にとっては、玄奘建立になる大雁寺は、やはり原点というべきであろう。1979年9月、はじめて西安を訪れた私は、64メートルのこの塔を一気に駆け登ったが、それから五年後の昨年10月再訪したときは、外国人・中国人参観者があまりに多く、階段を登るのもままならぬのにおそれをなして登らず、塔のまわりをのんびり散歩するほうをえらんだ。

塔のてっぺんから北を見おろせば、西安市街を一望のもとに収めることができる。この古都は、唐代には世界でも指折りの国際都市であった。碧眼紅毛の西域人が市中を闊歩し、共通の国際語でもあったペルシア語を介しての商ないがさかんで、また西方の宗教がどっと流れこんだ。なかでも、ペルシア起源で中央アジアを経て長安にたどりついたマニ教は、雨乞いの術などに化けつつ中国全土にひろがったが、邪教として迫害されても普及した原因のひとつは、国際都市長安の民衆の文化的な胃の腑のしたたかな強さに在ったであろう。

塔のてっぺんから西安市街を見おろしながら、私はもちろん三蔵法師玄奘の西天取経の旅を思った。その壮大な旅のコースのほんの一部は、1975のソ連領中央アジア旅行でなぞったものの、長安を出発して西行しタクラマカン砂漠の北の天山南路をめざすコースは、私もそのとき行くはずのものであった。かつて行った土地への回想と、これから向かう土地への思いが交錯するうち、大雁塔からの連想で、ソ連領中央アジアのまっただなかのオアシス都市ブハラの市中にそびえるカリヤンの塔を思い出した。13年紀の建立であるから、玄奘はもちろんこの塔を見てはいない。高さ46メートルのこのカリヤンの塔は、罪人を袋づめにしててっぺんから落とすための処刑の塔だったのである。

昨年10月の大雁塔再訪まで、私は『西遊記』にゆかりの深いもうひとつの塔を訪れていた。1983年7月の福建省泉州への旅は、その塔に登ることだけを目的としたものだった。その塔とは、泉洲市開元寺にある東西の二塔のうちの西塔、正しくは仁寿塔である。

長安が唐代における一大国際都市なら、泉州

は宋・元代における世界一の大貿易港であり国際都市であった。いまでは港湾が浅くなってさびれているが、しかし台湾海峡に面して南海への門戸をひらいていたこのまちには、いまでもイスラム寺院がのこっていて、信徒たちの礼拝の場となっている。かつてはアラビアの富商たちがかたまって居住していたが、その居住区たる「蕃坊」のあとはなくなっていても、イスラム教徒やキリスト教徒の墓や墓石はのこっている。墓石に刻まれている文字も、アラビア文字・シリア文字・パスパ文字など多様だ。まちを歩けば、明らかにアラビア人の血を引いていると思われる顔が多い。

開元寺西塔のサルのレリーフ（筆者撮影）

さて、この泉州のほぼ中央にならんでそびえる東塔と西塔は、ともに八角五層、それぞれの高さは48メートルと44メートル。13世紀の建立である。大きな石材を積み重ねた石塔であるが、この高さにまで石材を重ねるために、土を盛り、その斜面を伝って運搬したという。高くなるほど盛り土の量がふえ斜面のすそ野がひろがる道理で、塔からはるか離れた市街の一隅にある土山街という道路名は、南宋のときの工事の名残りである。

さて、この東西二塔の各層壁面に仏教レリーフが彫りこまれている。八角の壁面にそれぞれ二種類ずつであるから、2×8×5＝80、二塔で160ということになるが、私の目的は西塔の第四層の東北壁面にある行者姿のサルのレリーフであった。くわしいことは、すでに拙文「孫悟空の原像」（『図書』1983年12月号）ほかで述べたので重複を避けるが、要するに、13世紀前半のここ泉州において、サルが行者姿をして三蔵法師をまもりつつ西天取経の旅に出たという物語が語られていたということなのである。同じ西塔第四層の南面には「唐三蔵」の銘のある玄奘像があり、それは梁の武帝にむかって合掌しつつ帰国報告をしている姿だ。梁武帝は6世紀前半の人であるから、玄奘よりちょうど百年前。玄奘がどうして百年前の皇帝に帰国報告できたのか── さきのサルのレリーフとあわせて不明な点はなお多い。いずれまた行って調べたいと思っている。

行きたいと思いながら行っていない塔として杭州の六和塔がある。仲秋のころ、この塔に登れば眼下の錢塘江に烈しい浙江潮が逆流してくるのが見物できるはずである。南宋の皇帝たちはそれを楽しんだあげく、浙江潮ならぬモンゴルの大軍によって国を亡くしてしまった。

行きたいと思っても行けなくなった塔に雷峰塔がある。『白蛇伝』の舞台として有名であったが、塔の煉瓦を抜いて家におくと家内安全であるという迷信があり、そのために1924年9月に突如倒壊した。その報を聞いた魯迅は、ただちに「いい気味だ」と書いたが、なぜ「いい気味」なのかは、かれの「雷峰塔の倒壊を論ず」「再び……を論ず」に就いて考察されたい。

中野先生の著書で下記のものは、先生の寄贈などにより、当館にも所蔵しています。

砂漠に埋もれた文字―パスパ文字のはなし（829―N39）
北方論―北緯40度圏の思想（914.6―N39）
迷宮としての人間（914.6―N39）
海燕（913.6―N39）
中国人の思考様式―小説の世界から（923―N39）
悪魔のいない文学―中国の小説と絵画（920―N39）
辺境の風景―日本と中国の国境意識（204―N39）
孫悟空の誕生―サルの民話学と『西遊記』（923―G54 n）
中国の妖怪（147―N39）
西遊記の秘密―タオと煉丹術のシンボリズム（923―G54 n）

最近の購入希望図書より

皆さんの購入希望によって、新しく蔵書に加えられた図書の一部を紹介します。

象徴交換と死　J.ボードリヤール著　筑摩書房　1984　（361－B 28）

トットチャンネル　黒柳徹子著　新潮社　1984　（289.1－Ku 78）

頭痛・肩こり・腰ロ一葉　井上ひさし著　集英社　1984　（912.6－I 57）

方舟さくら丸　安部公房著　新潮社　1984　（913.6－A 12）

空想画房　安野光雅著　平凡社　1984　（049－A 49）

女心とからだ　内田真砂ほか著　創元社　1985　（495－U 14）

シェイクスピアの人生観　P.ミルワード著　新潮社　1985　（932.33－C－Mi 29）

仮面の谷崎潤一郎　大谷晃一著　創元社　1984　（913.6－Ta 88o）

「お葬式」日記　伊丹十三著　文芸春秋社　1985　（778－I 88）

＊＊＊　NEWS　＊＊＊

寄贈紹介

昭和59年度文学部英文学科卒業生の皆さんから、時計が寄贈されました。カウンター内、西向きに取りつけました。

資料移動のお知らせ

春季休館中に、下記の資料の配置場所を変更しました。

参考図書（400～600）自然科学・工学・産業→243室へ

この部門につきましては、一般図書と参考図書を近くに置き、利用の便宜をはかりました。なお、和書（300）社会科学、および和書（918.6）現代日本文学・全集の一部も移動いたしました。

オリエンテーションについて

4月8日・9日に、例年の通り、新入生を対象としたオリエンテーションを行いました。その時に映写したスライドは、アルバムにして調査案内カウンターに置いてありますので、自由にご覧下さい。

特別展示について

図書館では、その時話題になっている人物や事柄について資料を紹介する、特別展示を行っています。今年度は、4月に野上弥生子関係の展示を行いました。また、全学講演会講師、渡辺和子関係の展示を予定しています。

なお、前年度に行った展示には、次のようなものがありました。

Sr.クサベラ・レーメ先生関係
全学講演会講師　谷昌恒関係
国文科集中講義講師　李恢成関係
卒業講演会講師　川中なほ子関係
林達夫関係
トルーマン・カポーティ関係
有吉佐和子関係
寄贈資料　平治物語絵巻展示

これらの展示については、調査案内カウンターにスクラップがありますので、ご覧下さい。

藤女子大学
藤女子短期大学　図書館だより　第21号　1985.6.1　発行
発行者　札幌市北区16条西2丁目　藤女子大学図書館